

地域形成史フォーラム 2026 高知

# 昭和南海地震 80 年 南海地震を再考する

## 予稿集



主催 JSPS 科学研究費助成事業 基盤研究(A)

「災害文化を内包する地域の記憶継承に資する地域歴史資料学と地域形成史の構築」  
(研究代表 奥村弘 神戸大学) 研究グループ

共催 高知県立高知城歴史博物館

人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト  
「歴史文化資料保全の大学・協働利用機関ネットワーク事業」神戸大学拠点

## 目次

ご挨拶 研究代表者 神戸大学理事・副学長 奥村 弘 02

開催趣旨 愛媛資料ネット代表 愛媛大学教授 胡 光 03

### 基調講演

「南海トラフ地震の新しい被害想定を歴史から読み解くー安政・昭和・令和をつなぐ教訓ー」

愛媛大学客員教授 MORI 研究所代表（インフラ強靱化メンテナンス最適化研究） 森 伸一郎 04

### 研究報告

「宇和海沿岸における安政南海地震の津波被害」

愛媛資料ネット委員 愛媛県歴史文化博物館学芸課長 井上 淳 06

「宮崎での昭和南海地震は、なぜ被害が少なかったのか」

宮崎歴史資料ネットワーク事務局 九州医療科学大学准教授 山内利秋

ご挨拶

研究代表者 神戸大学理事・副学長 奥村 弘

日本列島は、地震や大規模水害など災害が持続的に生起する環境にあります。そのような中で人々は災害の記憶を多様な地域歴史資料として蓄積し、生きるための知恵として「災害文化」を形成してきました。

本科研グループの代表者・分担者は、1995 年の阪神・淡路大震災以来、東日本大震災をはじめとして、頻発する地震災害や風水害において、地域に残された歴史資料と、災害そのものを記録する災害資料の保存・活用について実践的な研究を進めてきました。この取り組みは、歴史学分野における災害対応の先進的研究として、災害文化や地域歴史資料の社会的な認知度向上に貢献し、国際的にも高い評価を受けてきました。

しかし現在、災害の多発化に加え、高齢化と人口減少が急速に進行し、地域歴史資料の保全と歴史文化の継承は、ますます困難な状況に直面しています。能登半島地震の被災地にも見られるように、中山間地域を中心にこの傾向が拡大しており、地域の記憶継承を確実にするための新たな学術的対応が喫緊の課題となっています。

本科研は、この困難な状況に対処し、地域の記憶継承の主体である地域の人々が参画しうる地域歴史資料の保存・活用を充実させるとともに、地域の歴史文化の継承を進めるための地域形成史の構築をめざして、以下の2つのテーマに取り組んでいます。

- 1 実践的な地域歴史資料学の手法の深化：災害対応の現場から生まれた歴史資料保存・活用についての研究手法を、人口減、高齢化などの地域課題に対応できるようその手法を深化させること
- 2 地域形成史の構築：地域歴史資料学の成果を踏まえ、災害の記憶と人々の「生存」の営みを含み込んだ、地域住民の記憶継承に資する新たな地域形成史を構築すること

このような目的から本研究では実践的な研究を重視していますが、それを総括する場として最も重要な活動の一つが、毎年一度開催を予定している「地域形成史フォーラム」です。ここでは、各地の実践をふまえて、研究者や学芸員等歴史関係者だけでなく、地域住民のみなさんとともに議論を進めることで、大規模災害を地域形成史に位置づけ、地域の歴史像を関係者で共有するとともに、未来に向かって歴史資料の保存・活用の手法を探ることをめざしています。

初年度にあたる 2025 年度は、本科研分担者で、愛媛県を中心に災害時の歴史資料保存とその活用を進めてきた愛媛大学の胡光さんのご尽力で、トラフ型地震による大規模な被害が想定されている高知県で「地域形成史フォーラム高知 -昭和南海地震 80 年 南海地震を再考する-」を開催することとなりました。会場提供いただきました高知県立高知城歴史博物館をはじめ、関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

## 開催趣旨

愛媛資料ネット代表 愛媛大学教授 胡 光

本フォーラムは、愛媛資料ネットが幹事を務め、高知県立高知城歴史博物館を会場として、オンラインとのハイフレックス方式でお届けします。

開催にあたっては、渡部淳館長様をはじめとする高知県立高知城歴史博物館の皆様にご多大なご協力を賜りました。開催にご協力いただいた皆様はもとより、会場内外で参加いただいている皆様に、感謝申し上げます。

愛媛資料ネットは、2001年3月24日の芸予地震にあたり、資料救出をするために結成された団体です。神戸、山陰、そして愛媛の順番で、全国3番目にできた資料保全団体として活動をしています。

2016年12月、愛媛資料ネットが主催した愛媛大学南加記念ホールでの全国史料ネット研究交流集会では、地域歴史遺産の保全が地域の歴史を守ることに加え、現在・未来に向けての防災や減災につながることを確認し、災害に強い地域社会をつくる活用方法を考えました。このときは昭和南海地震から70年という節目の年でもあったため、「南海地震を伝え、備える」という特集を組み、森伸一郎氏の基調講演をはじめ、関係する地域の方々に南海地震を意識した報告をお願いしました。そこでは、伝えようとしなければ忘れられてしまう歴史の特性や、誤った情報、例えば、昭和南海地震において家屋の倒壊被害が少なく記録されているのは、戦後すぐだったため家が少なかったということなど、史料批判によって正しく情報を伝えることの重要性が確認されました。

それから10年が経ち、今年は昭和南海地震から80年になります。その間、2018年の西日本豪雨で愛媛県は大きな被害を受けたほか、2019年には国土地理院が自然災害伝承碑の地図記号を新たに制定し、国民の防災意識高揚に努めるなど新たな動きがありました。

さらに、2024年4月には豊後水道でM6.6の大きな地震が発生し、四国・九州では震度6や5の地域が多数観測されました。政府は、2025年3月に南海トラフ地震の想定情報を更新し、防災対策は喫緊の課題として新たなフェーズに入ったと言えます。

本フォーラムでは、このような近年の動向を踏まえて、昭和南海地震80年となる本年、防災工学や歴史学など文理の枠を超え、最新の情報を総合的に融合し、南海地震を再考する新たな機会とします。来るべき南海地震に向き合って、文理の知識を結集し、災害に強い地域社会づくりに、歴史学がどのように関わっていけるのか、考えてみようとするものです。

## 【基調講演】

### 南海トラフ地震の新しい被害想定を歴史から読み解く ― 安政・昭和・令和をつなぐ教訓

MORI 研究所代表、愛媛大学客員教授、博士（工学）・技術士（建設部門）・土木学会フェロー

森 伸一郎

近年公表・改定が続く南海トラフ地震の被害想定は、しばしば数値の巨大さや最悪ケースの強調によって受け止められがちである。しかし本講演では、被害想定を単なる「未来予測」としてではなく、過去の巨大災害から社会が何を学び、何を学び損ねてきたかを映し出す鏡として捉え直すことを目的とする。

地震や津波といった低頻度巨大災害は、人が生涯で実体験として学ぶことがほぼ不可能な現象である。心理学的に見ても、人や社会は体験や他者の体験の伝聞を通じて学習し、行動を変容させながら最適解へ近づいていく。しかし南海地震のように百年規模で繰り返される災害に対しては、体験学習は成立せず、文字として残された史料・記録に基づく学習に依存せざるを得ない。この点において、史料学は地震学・地震工学・防災減災学の基盤そのものである。

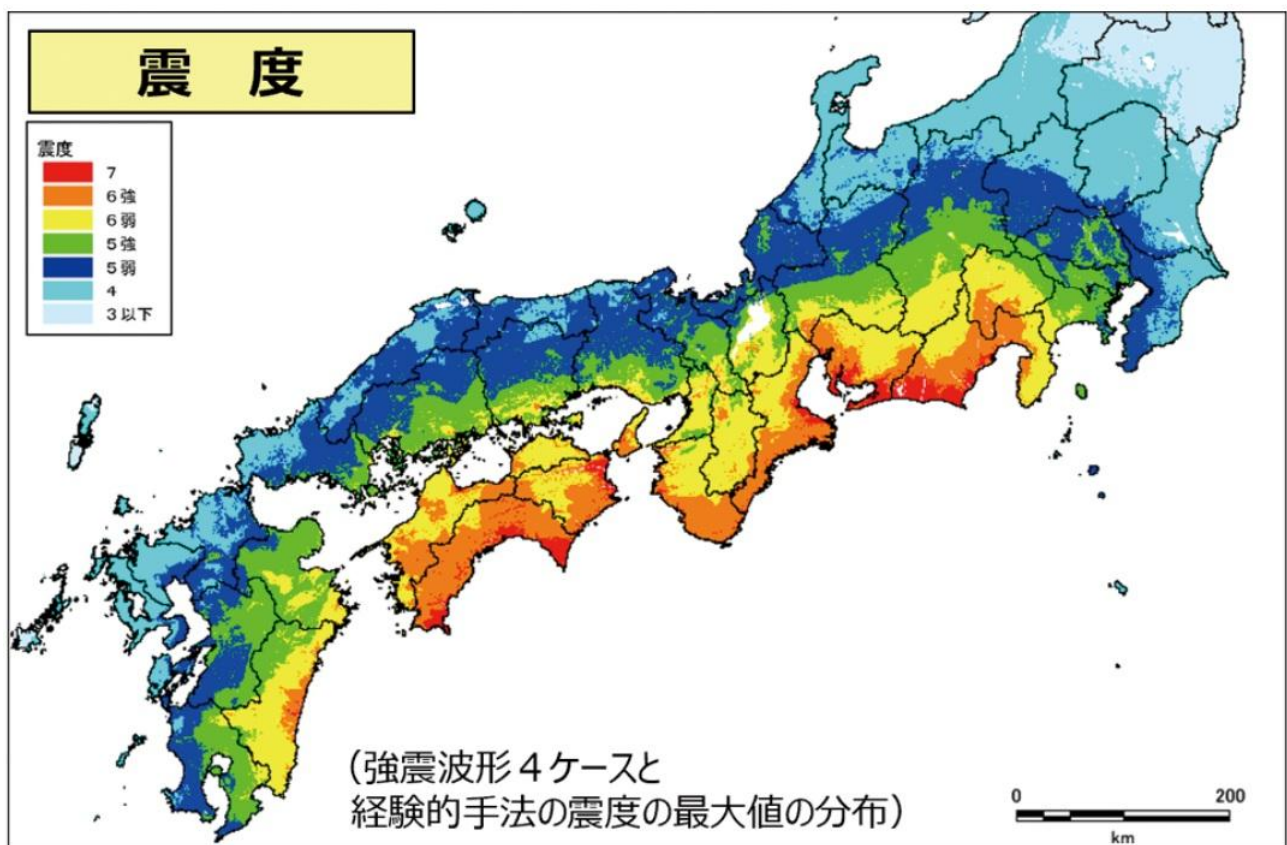
安政南海地震（1854 年）の史料には、揺れの様子、津波到達の時間、浸水の広がり、人々の恐怖や行動、社会の混乱と再生の過程が克明に記されている。これらの史料を丹念に読み解くことで、地域ごとの被害特性や災害への応答のあり方が浮かび上がり、現代の被害想定を相対化する視点が得られる。

昭和南海地震（1946 年）は、科学的観測と制度化された防災の時代の始まりに位置づけられ、被害調査や復興過程が体系的に整理されうる最初の南海地震であった。しかしながら、この段階における被害記録や調査体制は、史料という立場から見ればなお十分とは言えない。観測網は限定的で、調査手法や記録様式も統一されておらず、社会全体として災害を体系的に記録・分析し、次の備えへと還元する仕組みはまだ確立していなかった。

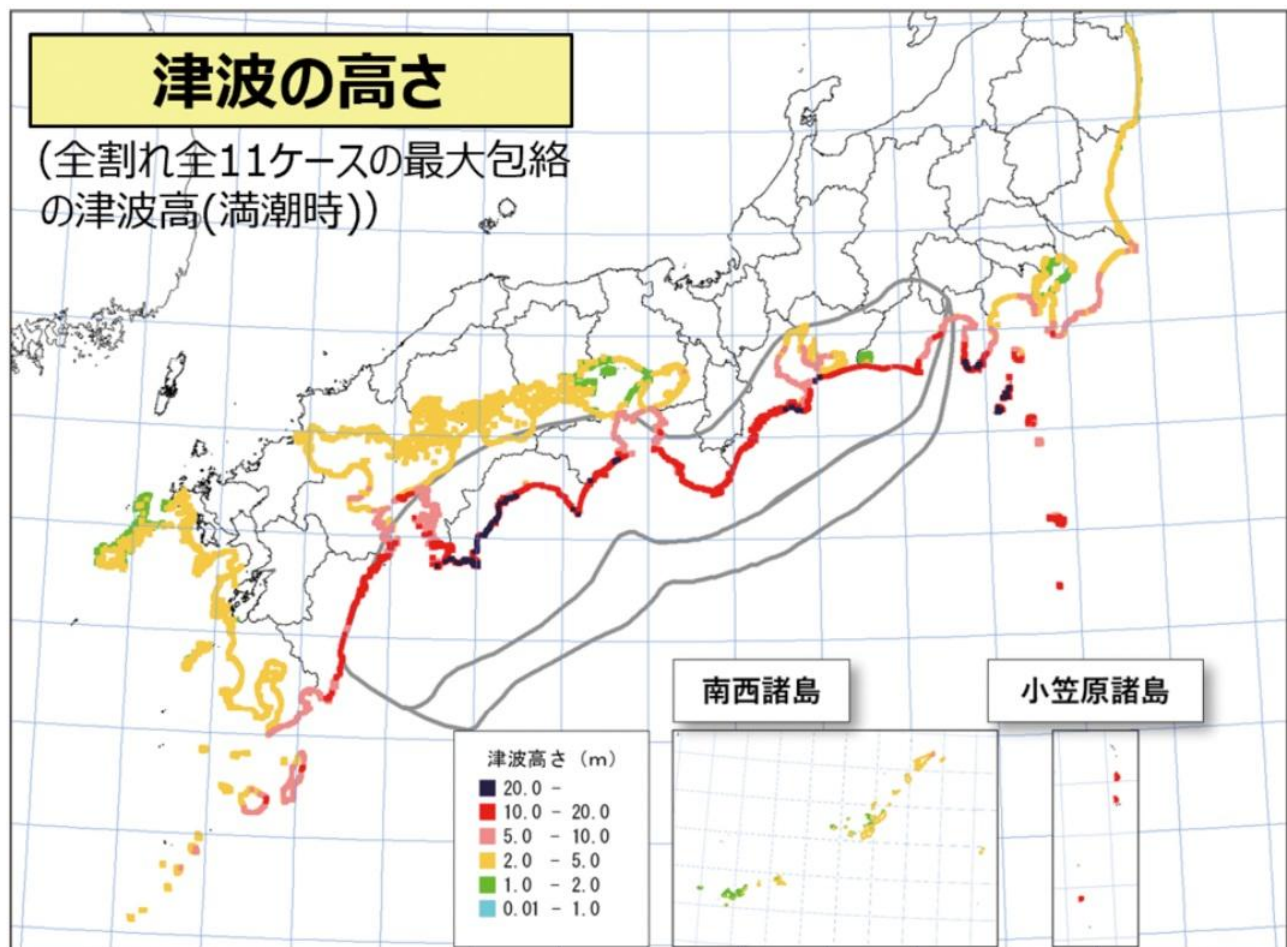
科学的知見と社会制度とが結びついた防災体制が本格的に形成され始めるのは、伊勢湾台風（1959 年）による甚大な被害とその反省を経て、災害対策基本法（1961 年）が制定されて以降である。この時期を境に、被害調査の標準化、行政体制の整備、事前対策としての防災・減災という考え方が、初めて国家的枠組みとして位置づけられることとなった。

令和に示された最新の南海トラフ巨大地震の被害想定は、最大クラスの地震・津波に加え、時間差において発生する地震（先発地震と後発地震）、広域かつ長期にわたる社会機能の停滞など、これまで以上に複合的な被害様相を描き出している。これらは数値モデルの高度化のみならず、安政・昭和の南海地震に関する史料の精査によって明らかとなった、被害の時間的推移や社会的影響の重なりを踏まえて構成されたものである。一方で、住宅耐震化や津波避難計画の進展といった成果がある反面、行動変容が十分に伴っていない現実も明らかになっている。

本講演では、防災を「災害が目前に迫ったときの対応」とする狭義の概念にとどめず、兆しのない段階から被害を減らす減災＝リスクマネジメントとして再定義する。被害想定は恐怖を煽るための数字ではなく、社会が学習し続けるための知的資源である。1854 年安政南海地震、1946 年昭和南海地震、1959 年伊勢湾台風、1961 年災害対策基本法、そして令和の被害想定を一本の思考の線で結び直すことで、南海トラフ地震の新しい被害想定を「次の一手を考えるための教訓」として共有したい。



南海トラフ巨大地震の震度分布（中央防災会議、2025）



南海トラフ巨大地震の津波高（中央防災会議、2025）

## 【研究報告】

### 宇和海沿岸における安政南海地震の津波被害

愛媛資料ネット委員、愛媛県歴史文化博物館学芸課長  
井上 淳

嘉永7(1854)年11月5日の安政南海地震は、南海トラフ沿いで起きた海溝型地震と考えられており、太平洋に面した土佐藩では、津波が襲った海岸部と火災に見舞われた高知城下を中心に、死者372人、流失家屋3812軒、倒壊家屋2939軒という大きな被害を受けたとされている。土佐に隣接する伊予の宇和海沿岸部については、地震や津波による被害を記した関係史料を広く収録した東京大学地震研究所編集の『新収日本地震史料 第五巻別巻五ノ二』（日本電気協会、1987年）が刊行されているが、近年になり、掲載された史料の翻刻の見直しや新出史料の紹介が行われている。本報告ではそれらの成果を踏まえながら、新出の2つの史料を用いて宇和海沿岸における安政南海地震の津波被害の実態を明らかにする。

最初に取り上げる「嘉永七寅年十一月大地震記録」（以下、「大地震記録」）は、宇和海の北寄り、三瓶湾沿岸の被害が記された記録である。書かれたのは地震から1カ月後の12月で、筆者として安土浦（西予市三瓶町）の73歳の老漁民、佳亭仙風の名前が記されている。

「大地震記録」は地震の発生を夕七ツ（午後4時ごろ）とし、5〜7刻（2時間半〜3時間半）の長時間にわたり「大ニ震イ家居モ震イ崩ス程ナリ」とあるように、強い揺れがあったことを伝えている。安土浦ではこの揺れで家が傾いたり、壁土が落ちたりするなどの建物の被害が出ている。暮れ頃には津波が押し寄せ、集落に流れ込んでいく。津波の高さは、安土浦が吉田藩に提出した報告に6尺位（約180cm）とある。この津波は各住宅の床下にあった貯蔵用の「イモツボ」まで到達し、安土浦の大部分に当たる27軒で、主食のサツマイモを濡らしている。安土浦の村人は、「大地震ノ後ハ大潮満ルモノ也」と言い合って避難し、松寿院という寺の前にある田圃、天満宮の脇など、標高が高いところに避難小屋を建て、夜中は火を焚いて暖を取っている。「大地震記録」は地震直後からの村人の様子を詳細に記すが、そこには佳亭仙風が後世の人々に地震の教訓を伝えようとする強い意志が感じられる。

次に取り上げる「此度大地震大汐ニ付訴書并諸願書一卷／御裁許書其外取斗書久家浦焼失之儀茂書加」（以下、「諸願書一卷」）は、外海浦（愛南町）庄屋の二宮市右衛門が宇和島藩に提出した宇和海南部の被害報告である。冒頭の地震発生直後の報告によると、夕七ツに前代未聞の大地震が起き、津波が押し寄せたため、村人は高い場所の畑や寺に避難、なんとか命が助かっている。数日間は避難小屋を建てて、昼夜の寒さをしのぎ、神仏に祈る日々を過ごしている。昼夜絶えず余震が続いて終わりがみえないため、居宅の修繕用に近村から提供された真縄・筵・蓆俵で応急措置をして自宅に帰る者もいたが、大きな地震が再び起こるとの風評もあり、高い場所で避難生活を続ける者も多かった。発災直後の村人の気持ちを「昼夜心の不安事」と表現している。

「諸願書一卷」で注目されるのは、冒頭の記事に続き、外海浦が宇和島藩に提出した集落ごとの被害集計が筆写されていることである。居宅については、津波で押し流されたり、地震で破損したりして住めなくなった家を数えているが、その合計は266軒。明治初期の被害集落の家数合計が852軒であることから、外海浦全体のうち約31.2%が被災したことになる。なかでも被害が大きかった集落としては深浦・岩水浦・垣内浦が挙げられるが、いずれも深浦湾の東側、陸地に挟まれて海が狭くなったところに立地している。最初の安土浦についても三瓶湾の一番奥に位置する点で、深浦・岩水浦・垣内浦と共通性が高い。今後は宇和海沿岸部の地震史料を多く収集することで、リアス海岸の地形と津波被害との関連性が見えてくるのではなかろうか。



## 1. はじめに

### 安政南海地震の基本文献

東京大学地震研究所編集『新収 日本地震史料』第5巻 別巻5ノ2 (日本電気協会、1987年)  
～伊予の安政南海地震に関わる資料 p 1959～2074

『新収 日本地震史料』の史料翻刻の問題点

柚山俊夫氏「宇和島領御荘組における安政南海地震の地震・津波被害」(『伊豫史談』383号、2016年)  
地震史料の翻刻(←『一本松町誌』)「人之損し者深浦之者船中ニ百人相果ル」

柚山俊夫氏の翻刻「人之損し者深浦之者船中ニ而人相果ル」

※『新収 日本地震史料』を用いる際には、原史料との校合が必要

『新収 日本地震史料』に掲載されていない史料の新たな発掘が課題

## 2. 宇和郡安土浦の地震記録

### 2-1「嘉永七寅十一月大地震記録」とは【史料1】

表紙中央「嘉永七寅十一月大地震記録／十二月改元安政ト成ル」

表紙左下「安土浦三勢氏」

作者：「安土浦住付き佳亭仙風 豫州宇和郡岩野之郷之内後学 行年七十有三才老漁夫識之者也」

→吉田藩領安土浦の老漁師佳亭仙風

### 2-2 安政南海地震(嘉永7年)の発生

11月4日：「小地震振イ」(東海地震)

11月5日：「五日夕七ツ比大地震ニテ五七刻モ不止」(南海地震)

→発生時刻～夕七つ(午後4時頃)の「大地震」五～七刻(150～210分)の長い(頻繁な)揺れ

### 2-3 安政南海地震(嘉永7年)による被害

①紺屋辰介は藍瓶10瓶余りに潮が入り、2貫目ほどの被害。

②油屋利喜松の家は床上の3～4寸(10～12cm)ほど潮が上がり、油1石余りに加えて、麦・米・粟・諸道具を津波で流す。家も揺れで傾き、作事しないと住めない有様。2貫目ほどの被害。

③磯崎集落の家は潮と地震で壁が落ちてしまい、京屋新八の家は地震で傾き、壁が割れて土が流れ出しており、新居にもかかわらず手を入れないと住めない有様。

④安土浦丈八俵の七郎兵衛が営む塩浜では、土手を潮が越えて大瓶に流れ込み、塩を濡らして1～2貫目の被害。→地震直後の安土浦全体の被害額は10貫目余り(現在の約2000万円)

### 2-4 安土浦庄屋の被害報告(11月7日)

御訴申上候事

一昨五日夕七ツ半頃より大地震仕候処、暮合ニ及び大損ニ罷成、六尺位 満潮処々痛左之通

一御水田犬水門両脇石垣長三間位破損仕候

一庄屋庄右衛門控之内、御手洗築地石垣長十間位破損仕候

一藤八屋敷石垣長五間位破損仕候

右之通去年痛出来仕候、其外怪我人等者壱人茂無御座候ニ付此段御訴申 上候、以上

寅十一月七日



安土浦庄屋  
安土浦役人

御代官

御在目付 御中見中

- ①11月5日の夕七時半（午後5時）頃に大地震、6尺位（約180cm）の満潮（津波）
- ②御水田犬（大カ）水門の両脇の石垣が長さ3間位（約5.4m）破損
- ③御手洗の築地（石垣）が10間位（約18m）破損
- ④藤八屋敷の石垣が5間位（約9m）破損

→「明治20～30年頃之三瓶村鳥瞰図」松本早苗画（昭和16年）【図1】をもとに被害を紹介

## 2-5 安土浦の津波の高さ

「大地震記録」にみるサツマイモの被害

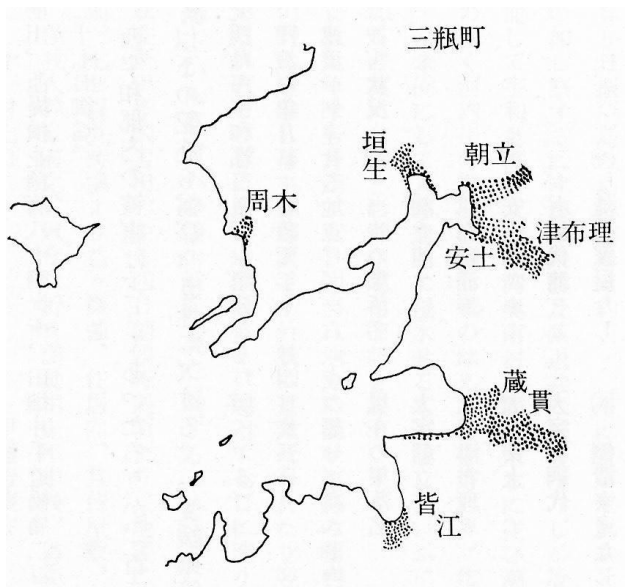
「濱辺ノ家ハ琉球芋ナトヌラシ又ハ流シ候者モ有之」

「少し坪底へ潮付少々ぬらし候へとも、是は指支る程ニハなし」

→住宅内にサツマイモを保存するイモツボ

サツマイモの被害軒数～浦中16軒、磯崎集落11軒、合計27軒

※安土浦の集落の大部分に津波が打ち寄せている。油屋利喜松など一部は床上に到達、干拓地に近い磯崎集落の被害が大きい



「愛媛管内津波被害調書」（『三瓶町誌』）

平均潮位より3.5m、潮位が高い時と比べても2mの津波の高さと推測

## 3. 宇和郡外海浦の地震記録

「諸願書一卷」（外海浦庄屋二宮家文書）

表紙「此度大地震大汐ニ付訴書并諸願書一卷／御裁許書其外取斗書久家浦焼失之儀茂書加」

### 3-1 地震発生時の様子

嘉永七寅十一月五日夕七ツ頃前代未聞大地震大汐ニ而浦中人命相助而已ニ而銘々畑或者両寺江魁付、数日所々江仮小屋相掛昼夜寒氣相凌実ニ人々神仏を禱而已、数日相立候而茂日々昼夜共震動不絶其内限無之事故銘々帰宅之思ひをまし、近村方マ繩筵菰たわら之類恵貫夫々江相配差向処、取繕追々ニ本宅江罷歸り候、其後も又候悪評聞伝へ再登山致す者数々有之、昼夜心の不安事

(内容)

- ・11時5日夕七つ(午後4時)頃に前代未聞の大地震、津波が発生
- ・畑や二つの寺に急いで避難、数日間は仮小屋をつくり寒さをしのぐ
- ・近村から提供された真縄・筵・菰俵で修繕して、自宅に帰る者もいたが、また地震が起きるという風評もあり、再び自宅を離れ避難生活を送る人も。→昼夜ともに不安が募る

### 3-2 宇和島藩伊達家文書「大控」にみる外海浦の津波被害

「大控」宇和島藩伊達家文書 →深浦番所の番人や代官手附による藩への報告に基づく記述

#### 【深浦番所の番人の報告】

一深浦御番人方相達候ハ、過ル五日七ツ時過ル大地震ニ而、無程大津波打参、御番所座下迄参り、所々少々ツ、相損、御蔵は壁多分震落并満倉役所其儘流失、炭小屋同断、…(中略)…、右役処深浦迄流参、屋根其儘故若哉と存屋根取除見候処、御金箱并帳面類も追々取上、且炭類も追々流寄取上置候へ共、深浦ニおゐてハ過半流失之旨…(後略)…

(内容)

- ・11月5日の夕七ツ時(午後4時)過ぎに大地震があり、程なく大津波が深浦番所の床下まで押し寄せている
- ・満倉の山方役所が津波により流され、深浦に流れ着いたが、屋根を取り除いたところ、御金箱や帳面類を取り出すことができた
- ・深浦では半分以上の家が流失している。

#### 【代官手附の報告】

一外海浦之内、深浦潮壱間半位茂段付押参ニ付、浦中急々高ミ之所へ逃候処、追々ニ浜辺江相上候、凡家数百軒余之处三十軒余残り、余は水中ニ相成、多分流失いたし候由、岩水浦は家三・四軒相残候計ニ而皆流失致、垣内浦・久良浦等茂余程之痛ニ而家数余計不相残、船越浦ハ役人宅へ潮相掛船壱艘打上ケ納屋之屋根江引掛り、船屋根共々引流シ候趣、外海之在様は早速御代官所手附差向見分爲致候へ共、六日朝迄潮先強く浜辺へ下り候事出来不申、山より見渡候計、委細之義は未聊も相分不申…(後略)…

(内容)

- ・深浦には1間半(約2.7m)の高さの津波が段になって押し寄せる
- ・深浦の村人は急いで高い場所に避難したところ、津波は浜辺にあがり、家数100軒のうち30軒余りを残して水中となった
- ・垣内浦・久良浦でもかなりの被害で家数はそれほど残っておらず、船越浦では、役人宅に潮がかかったほか、船1艘が打ちあがり、納屋の屋根に引っ掛かって屋根もろとも流れていった
- ・当座の食料を城辺村庄屋の二神十郎左衛門と岩松出身の豪商小西卓蔵が運び込んで提供している

### 3-3 「諸願書一卷」に収められた外海浦の被害報告

安政南海地震による外海浦の被害の全貌(表1)

居家の被害状況「但汐押并地震ニ而相破レ多分住居難相成分」

→外海浦全体で居家266軒、納屋114軒が被災 被災軒数は深浦・宮山浦(居家90軒、納屋62軒)、久良浦(居家45軒、納屋6軒)、船越浦(居家41軒、納屋11軒)が多い

深浦にあった庄屋所の納蔵の被害

「但汐込ニ相成御蔵入ニ相成候分丈御米不残汐底ニ相成申候、尤俵数百五俵ニ御座候」

年貢米105俵(1俵4斗入りで換算すると42石)が潮漬 その他、御膳米・御囲米にも被害

久良砲台の玉薬蔵の被害 「但汐入御道具類外江流出申候」

表1 安政南海地震による外海浦の被害

集落名	居家	納屋	納蔵	玉薬蔵	牛	御膳米	御囲粃	納蔵米	家数1	家数2	被害率
単位	軒	軒	軒	軒	疋	合	俵	俵	軒	軒	%
船越浦	41	11							11	159	25.8
福浦	17	17				18			21	109	15.6
内泊浦	20					120			8	122	16.4
久家浦	6								7	39	15.4
久良浦	45	6		1					20	188	23.9
垣内浦	10	3				20	4		2	27	37.0
岩水浦	37	15			3	42	14		24	51	72.5
宮山浦	5	7				171	60			157	59.1
深浦	85	55	1			111		105	52		
合計	266	114	1	1	3	482	78	105	145	852	31.2
※1 家数1は寛文7(1667)年の「西海巡見志」の記載に拠る											
※2 家数2は明治初期の「宇和郡地誌」の記載に拠る											
※3 被害率は「宇和郡地誌」の家数をもとに居家の被害軒数の割合を算出したもの											

地図 安政南海地震による浦ごとの居家の被害（国土地理院の地理タイルに被害軒数を記載）



外海浦の被害率は深浦湾の奥側集落（深浦・岩水浦・垣内浦）が高い  
→リアス海岸で複雑な津波の動きがあった可能性





【図1】「明治二三十年頃之三瓶村鳥瞰図」 方位：西が上

①集落部分、②段々畑、③水門、④遊水池、⑤御手洗の築地石垣、⑥松寿院、⑦松寿院前の田、⑧天満宮、⑨日吉崎

#### 4. おわりに

##### 宇和海のリアス海岸の地形と津波被害との関連性

「少し汐引取候様子ニ而有之候、然ル処又々高汐ニ相成、前之通三四度も上り候」（「永代控」立間尻庄屋赤松家文書）

##### 安土浦の佳亭仙風が伝えたかったこと

- ①大地震で長く揺れた場合は、津波が来るので海辺の低い所に屋敷がある者は用心して、食べ物をぬらさないようにしなければならない。
- ②大地震では家が揺れ崩れる危険性があるので、外に急いで出なければならない。また、地震の時に砂地の所に行ってはいけない。砂は揺れもぐったり、揺れ寄せたりするので、埋もれ死にする可能性があることを知るべきだ。
- ③大岩、大石の下の下には行ってはいけない。地震の時は崩れ落ちること間違いない。
- ④昔の地震では、津波が津布理村の遍路供養という所まで来たという言い伝えがある。この津波とは、148 年前の地震（宝永地震）のことではなく、300～400 年前の地震（慶長地震の可能性）のことと思われる。300～400 年前に大地震があり、その後 148 年前に大地震が起きて、そして今回また大地震となっているので、およそ 140～150 年の周期で大地震が起こるものと考えられる。

##### 参考文献

- ・『三瓶町誌』上巻（三瓶町、1983 年）
- ・井上淳「安政南海地震による三瓶湾沿岸村落の地震・津波被害―新出史料「嘉永七寅十一月大地震記録」の紹介―」（『研究紀要』第 23 号、愛媛県歴史文化博物館、2018 年）
- ・井上淳「安政南海地震による御荘組外海浦の津波被害」（『宇和海のくらしと景観』、愛媛県歴史文化博物館、2025 年）

報告者は、安政南海地震による宇和海沿岸部の津波被害を中心に研究しており、これまでに記した論考としては以下のものがあります。

- ・井上淳「安政南海地震による三瓶湾沿岸村落の地震・津波被害―新出史料「嘉永七寅十一月大地震記録」の紹介―」（『研究紀要』第 23 号、愛媛県歴史文化博物館、2018 年）
- ・井上淳「安政南海地震による御荘組外海浦の津波被害」（『宇和海のくらしと景観』、愛媛県歴史文化博物館、2025 年）

今回は限られた時間なので津波被害だけに絞って報告しますが、地震後に起きるデマなどの問題や、復興に向けた年貢諸負担などをめぐる庄屋と藩との交渉過程については論考を御覧ください。

## 【研究報告】

### 宮崎での昭和南海地震は、なぜ被害が少なかったのか

宮崎歴史資料ネットワーク、九州医療科学大学准教授

山内 利秋

#### 1 : はじめに

昭和南海地震は高知県等での被害に比べると、九州地方では比較的被害が大きくなかったとみなされる。この理由について考えてみると、実際の地震・津波による影響自体がさほど大きくなかった点もあるが、安政南海地震をはじめ過去の災害の記憶がコミュニティで機能していた事によって、人的被害を免れている可能性が高いと考えている。

本発表ではこの伝承と防減災という点に着目しながら、災害文化の継承について考えてみたい。

#### 2 : 昭和南海地震の宮崎での被害

昭和南海地震について、宮崎県内での状況は水路局の報告『水路概要』での「昭和 21 年南海大地震調査報告」に詳細をうかがう事が出来る。

##### 津波の状況

「細島及び大野川の験潮記録によれば引潮の現象は認められないが、大分、別府、佐伯、油津等の村民での調査によると、皆引潮の現象を認めている。第 1 波後の引きの誤認かもしれない。来襲時刻は震後細島では 70 分、油津 70 分、土々呂 60 分となっており、その回数は 3 回にして、共に第 3 波が最大である。津波の高さは佐伯より南志布志までは 1.3～1.5 メートル程度であった。」

##### 被害件数

土土呂(ママ)(延岡)：建物の床上浸水 52、床下浸水 146、船舶の流出 230

細島(日向)：建物の浸水数戸、木材流出若干

油津(日南)：建物の床下浸水 66、船舶の流出 1～2、船舶の中破 2、木材流出 50 石、漁網流出 5

崎田(串間)：船舶の流出 1

また、土々呂では橋梁 1 カ所破壊の記録がある(妙見橋、昭和 23 年には復旧)。

#### 3 : なぜ人的被害がなかったのか

延岡市土々呂地区では津波による床上・床下浸水件数、船舶の流出が多く、一定の物的被害があったものの、人的被害はなかったとされる。この原因は何か。

昭和 21 年当時、16 歳でこの地震を実際に体験した F さんらに対してインタビューを実施した事がある(2014 年 3 月 10 日実施)。

「その頃は家の中に井戸があり、父が井戸につるべを沈めたら水がなくなっていました。父は<津波が来るから危ないから荷物を持ってすぐ逃げろ>と言うので、手荷物を持って逃げました。もう父達は津波が来る事をわかってたんですね。」





写真1 霧島山への登り口となっている霧島神社

津波災害を畏怖し、真っ先に避難を求める意識に至るには否応なく過去の災害の記憶が強く伝承されていたからに他ならない。昭和南海地震から遡る15年前の昭和6年に発生した日向灘地震においても、住民は津波の危険性を察知して真っ先に避難している状況が当時の記録にある。

ここから理解出来るのは明らかに津波という現象と被害について、当時の人々が強い危機感を認識していたという点に他ならない。この要因としては安政南海地震の記憶が強く働いていると考えられる。安政南海地震の際、土々呂の人々は近くの霧島山にある霧島神社へ避難した伝承がある(写真1)。

### 土々呂大地震及び海嘯

「嘉永二年(ママ)当地方空前の大地震及び海嘯に襲われしが、土々呂村民の多くは沖合へ出漁中何者か足踏して動揺せしむるが如きより、何事かと互に船中を見廻すも事なく遥かに陸地を望み見て山の絶壁断崖の壊るる状物凄きよりスハコソ大地震なりと居宅を安じ急航して帰りたる時は地震は止みて安堵の色に複せし家人と共に強震の状を語り合ふ、時しも遠雷の如き音聞え又しても不安の耳を欽(そばだ)つ折、俄に起る悲鳴はヤレ又ツナミと村中は湧き立つ叫喚の聲と化し、再び色を失ひ何物も取りあへず皆霧島山へ避難せしが元来土々呂村の住宅は皆砂地なる為め根底を浚(さら)はれ半壊全壊数多く家財の流出するもの亦(また)夥(おびただ)しく之を山上より眺めて唯アレヨアレヨと騒ぐのみにて霧島山麓に打ち寄する波の音の物凄きに怯えて海中に入るものなかりしと言う。

其の時の体験により海嘯の時は先ず婦女子及び老人を避難せしめ、壮者は家にありて出来得る限り二階に諸荷物を揚げ戸締りをして引き瀬を待ちて出る事が肝要なり。慌てて戸締りなく逃げせし家には家財の多くを流出せしめたりと言へり。」柳田龍太郎編著 1937『元伊形郷土誌』(p.44)





#### 4：災害文化の継承



写真3 延岡市伊形小学校における防災教育活動の様子

(左. 宝永地震津波の記録がのこる井替川改修記念碑とひかり拓本の実践、右. ひかり拓本・伊形花笠踊りを通じての災害伝承に関するワークショップ)

災害の記憶継承が失われた要因としては、昭和 20 年代の戦後復興計画による都市復興や直轄化による河川改修、さらには高度経済成長期の新産業都市計画における港湾整備が進展した事等に起因する大きな景観の変容があり、また住民の災害に対する安心感の向上が働いたものと想定される。

一方、土々呂地区に隣接する伊形地区では、数百年前に発生したとされる津波を身体記憶として伝える民俗芸能「伊形花笠踊り」が継承され(写真 2)、宝永地震時の状況を刻んだ自然災害伝承碑がのこる。山内らは、ひかり拓本を用いて、これらを地区内の伊形小学校における防災教育で活用した(写真 3)。人口減少社会における防減災を、伝統文化から支える仕組みを、今後も構築していく必要性を痛感している。

※本研究は JSPS 科研費 JP23H00706 の助成を受けた。



写真4 延岡市土々呂港と水神

地域形成史フォーラム 2026 高知

昭和南海地震 80 年 南海地震を再考する 予稿集

発行日 2026 年 1 月 10 日

発行 JSPS 科学研究費助成事業 基盤研究(A)

「災害文化を内包する地域の記憶継承に資する地域歴史資料学と地域形成史の構築」

(研究代表 奥村弘 神戸大学) 研究グループ

〒657-8501 神戸市灘区六甲台町 1-1 神戸大学大学院人文学研究科

編集 愛媛資料ネット

〒790-8577 松山市文京町 3 愛媛大学法文学部日本史研究室